いざというときのために・・・。

昨年３月、大きな被害をもたらした東日本大震災から早くも１年が経過しようとしています。震災復興の道筋は着々と進みつつありますが、その道のりはまだまだ遠く険しいもののようです。

南海地震の発生が予想されている愛南町においても決して他人事ではなく、大きな被害と犠牲をもたらした震災の教訓を決して風化させないよう、いざというときのための取組を継続的に実施していかなければなりません。

今号では、先日行った「愛媛県津波避難訓練」と兵庫県篠山市との災害応援協定締結について、そして被災地ボランティアに参加した本町出身の学生からの投稿をご紹介します。

22 愛媛県津波避難訓練

９時００分、和歌山県南方沖を震源域とする強い地震が発生、宇和海沿岸に大津波警報が発令されたとの想定で久良地区を訓練会場に、地区住民や防災関係者など約５００名が参加して「愛媛県津波避難訓練」を行いました。

今回の訓練は、東日本大震災の教訓を踏まえ、津波が発生した際に県・市町・各関係機関が的確に連携して対応し、確実に住民避難につながるよう、県と津波被害が想定されている宇和海沿岸地域５市町合同のモデル的な津波避難訓練として実施したもので、自主防災組織による津波一時避難場所までの避難誘導や衛星系防災通信システムによる地震・津波情報の伝達、要援護者の搬送訓練などのほか、特に津波一時避難場所からさらに高所へ逃げる「二段階避難」の訓練を初めて実施しました。

防災無線から大津波警報が知らされると、自主防災会のメンバーらは高齢者宅を訪れ、津波一時避難場所に誘導。久良小学校の児童らは教員に誘導されながら、「津波が来ます！一緒に逃げましょう」と周囲に呼び掛けながら小学校まで避難。続いて、高知県で高さ10ｍの津波を観測したとの情報を受け、津波一時避難場所からさらに高所の校舎の屋上や裏山の砂防ダムなどに上がる二段階避難も行いました。このほか、地震体験車による揺れ体験、防災教育講演会なども行いました。

被災地ボランティアに参加して

大分大学4回生 山下壽美

私は11月に10日間程宮城県七ヶ浜町に行き、初めの3日間はボランティア団体として、そして残りは個人としてボランティアに参加しました。この10日間は言葉では表すには足りないほど、私にとってかけがえのない大きな経験となりました。

現地ではボランティア活動として、がれきの撤去、松林の清掃、仮設住宅でのコミュニケーション、イベント補助など多くの活動を行いました。活動を行う中で気づいたことは、ボランティアとは人とのつながりなのではないかということです。去年の漢字でもある「絆」。震災に負けじとがんばっている人々をとりまく多くの絆を強く感じるとともに、私自身勇気づけられました。

復興に向かっている東北。しかしまだ震災は終わっていません。遠く東北の地での現状を知ってほしい、そんな気持ちでいっぱいです。私が行った当時も七ヶ浜町だけで、全国各地から毎日200人以上のボランティアの方々が訪れています。多くの支援が行われる一方で、まだまだ支援を待っている多くの人たちがいます。しかし、支援といっても一方的ではなく、ともに立ち上がる姿勢を忘れてはいけないことも大切です。

私は東北の地でさまざまな人々と出会い、本当にたくさんの刺激をうけました。特に同じ世代の大学生を例に挙げると、生まれ育った地のためボランティアに励む学生や、遠く離れた九州から休学して半年間滞在し、活動を続け発信し続ける学生等。支援の形は様々ですが、みんな気持ちは同じです。多くの人に少しでも東北のボランティア活動に興味を持ってほしい、そして決して他人事とは思わないでほしいです。ちいさなことでもできることは必ずあります。そして、いずれ来ると言われている南海地震に備えて意識を高めてほしいです。また、似た地域から公共の対策なども学ぶべきであると強く感じました。

ただ行ったという事実で終わらせるのではなく、東北でできたつながり、絆を胸に行動を起こしていきたいと強く思います。また、大学卒業までに再び東北へ行きたいとも考えています。

ともに前へ、七ヶ浜。ともに前へ、東北。

左から、河南克典篠山市議会議長、酒井隆明篠山市長、清水町長、斎藤議長

17 兵庫県篠山市と災害応援協定を締結！

阪神大震災の発生からちょうど17年目を迎えた1月17日、愛南町最高峰「篠山（標高1064.6m）」の名称を縁として、兵庫県篠山市と「災害応急対策活動の相互応援に関する協定」を締結しました。愛南町にとっては遠隔地の自治体と災害協定を結ぶことは初めてのことで、大規模災害時に食料・飲料水・生活必需品などの物資提供、救援・医療活動にあたる職員の派遣、災害援助ボランティアの斡旋、被災児童・生徒の受け入れなどを行うことを申し合わせました。

今回の協定は、東日本大震災での災害支援のあり方を教訓に篠山市から申し出のあったもので、篠山市の酒井隆明市長は、「篠山市は山ばかりだが、愛南町は山だけでなく海もあり、とても魅力的。災害時だけでなく平時から子どもの臨海学校など市民レベルの交流も進めたい」と述べられました。清水町長も、「南海地震が予想されている愛南町の方が支援を受ける可能性が高い。いざというときに対応できるよう日ごろから交流を深めておきたい」と応えました。